アメリカン・ボード宣教師文書

――同志社女学校女性宣教師を中心として――

〈M. F. デントン書簡―訳および註―〉(14)

坂　本　清　音　監訳
阪　上　敦　子
小　林　弘　美
大　下　公　子
吉　岡　弘　子
矢　吹　世紀代
小　島　紀　子
柿　本　真　代
鈴　木　文　子

書簡翻訳：(13) からの続き

〈ベル書簡 BE-9〉【阪上、小林 訳】

1917年３月16日

メアリー　F. デントン
カリフォルニア州サンフランシスコ
マーケット通り417番地
太平洋ウーマンズ・ボード気付

拝啓　デントン様

十分に信頼できる幾つかの筋から、デントンさんがアメリカへ向かう途中

だと聞きました[1]。ですからこの歓迎の言葉をお送りしています。

この時期にデントンさんが休暇を取ることができて私どもは喜んでいます。そしてもちろん［また日本へ］帰国されるまでに十分な休養が何の支障もなく取れるように願っています。

同志社のためにお金［寄附金］を集めるご苦労についてはデントンさんから折々に伺うことになるでしょう。原田社長[2]はデントンさんのご計画について当方に書いてこられています。バートン博士[3]はこの時期、諸教派間共同の課業[4]が許す範囲で、あなたの計画が可能かどうかをじっくりと考えておられるのだと思います。バートン博士がデントンさんにとって真の助けとなってくださることは言うまでもありません。原田社長は経済的に必要なもののリストを送ってこられましたが、デントンさんがこちらにおられる間に、ご計画を前に進める大きな一歩が踏み出せるようにと切に願っています。

日本［キリスト教］合同大学［設立］計画[5]はまだ協議事項に入ったままです。しかしこの計画は何も同志社の妨げとならないと思います。もちろん事務局の私たちは、まず第一に同志社を支援することが自分たちの義務だと思っています。

デントンさんは身体も心もお元気な姿を見せてくださると期待しています。アメリカは戦闘に巻き込まれつつあり[6]、強いキリスト教の宣撫工作が必要だと盛んに言われたり、また行われたりしています。デントンさんはカリフォルニアにおられる間に、国際関係全般のためにきっと多くのことがお出来になるでしょう。あなたのためにいつも祈っています。本部はあらゆる方法でできる限り援助したいと願っています。

歓迎の意を込めて

敬具

イノック　F. ベル[7]

追伸　モンタヴィル・フラワーズの著書『日本人のアメリカ輿論征服』（*The*

Japanese Conquest of American Opinion)[8]は読む価値があるでしょう。ニューヨークのジョン・ドラン社出版です。この著は「戦争も平和も扱わず、むしろ愛国心の啓蒙」を訴えており、「この国［アメリカ］で極めて重要な問題について世論を変えようと努めている日本人宣伝活動家の議論と論理への返答」[9]だと主張しています。フラワーズ氏は、時代の先頭に立つカリフォルニア人の心情を述べているのだろうと思います。E. F. B.

1．デントンが横浜を出港したのは、1917年１月22日であった。
2．原田社長　前出（13）〈D-53〉註19参照。
3．バートン博士　前出（13）〈D-53〉註２参照。
4．1910年開催のエディンバラ世界宣教会議で決められた全体的課業のこと。いくつもの協議主題を経て、①継続委員会の設置　②基督教連盟及びキリスト教協議会の発足　③国際宣教協議会の設立等が決まった（前出（13）〈B-25〉註１参照）。
5．註４の課業の一つに、1909年東京で開かれた「日本におけるプロテスタント開教五十年記念会」の協議事項として、プロテスタント教派合同による「キリスト教大学」の設置が決まっていた。始めは、男子の大学であったが、日本では女子の高等教育が等閑にされている事実が明るみに出て、キリスト教女子大学設置の機運が高まった。それが1918年、専門学校令による**東京女子大学の開設**である。初代校長は新渡戸稲造。
6．アメリカの第一次世界大戦への参戦は、1917年４月６日ドイツに宣戦布告した日から、である。
7．Bell, Enoch F.（1874-1945）アメリカン・ボード宣教師。1902年11月来日。札幌、神戸を経て、京都には1904年から1905年にかけての半年間在任しただけであったが、デントンとは親交を結んだ。夫人の体調不良により1905年３月帰国。翌年からボストン本部の海外部門副幹事として活躍。
8．初版は1917年出版。Montaville Flowers（1866-1934）は市民活動家で、共和党の政治家でもあった。この書の中で日本人移民への反対姿勢を強く打ち出している。背景には1900年ごろから始まった排日運動の影響があるが、ニューヨーク・タイムズを始め、当時の書評の多くは著者の特異で感情的な表現には難色を示しつつも、彼の主張や論理には好意的であった。
9．*The Journal of Education* Vol.85, No.５（1917．２．１）Sage Pub., p.134 からの引用。

〈バートン書簡 B-28〉【大下、阪上 訳】

1917年６月26日

メアリー　F. デントン
カリフォルニア州サンフランシスコ
マーケット通り417番地

拝啓　デントン様

ベルさん[1]はノースフィールドで学生会議に出席中ですので、たった今届いた今月20日付のお手紙の内容を勝手に確認させて頂きました。お手紙を拝見して、あなたがこの国［アメリカ］におられ、もうすぐここボストンでお会いできることになると知って大喜びしております。その日を楽しみに待っていましょう。お互いに皆で話し合いたい事柄が沢山ありますね。

ここで一つ、多分あなたにとってアドバイスや助けになるであろうことを指摘しておきたいのです。ホール・エステート[2]の理事の一人デイヴィス氏[3]から聞き知ったのですが、彼が日本に滞在中、同志社がデイヴィス氏に影響を与えようと圧力をかけたやり方に大変いやな思いをしたというのです。デイヴィス氏は彼と話していた他大学の校長に［同志社には］非常にうんざりしたと言ったのです。もう一人の理事は同志社には基金請求権があるとは思えないし、理事たちは同志社への割当金に対しては消極的だろうと私に言いました。主にデイヴィス氏が持ち帰った報告によるのですが。

当方ではアメリカンボードと関係する個々の学校が理事たちに不愉快な思いをさせないよう気を付けていたのですが、デイヴィス氏は日本におられたので、同志社の関係者が彼に近づいたのも至極当然のことでした。ですが、同志社の関係者は明らかにやりすぎて、こちらでは何も出来ないほどに行く手をふさいでしまったのでしょう。しかし、当方で出来る限りのことはするつもりです。お願いしたいのは、あなたからもアメリカにいる同志社関係者の誰からも、これ以上口を出さないで欲しいということです。あと少しでも

要請を出せば、多分何も貰えなくなるでしょう。

アメリカン・ボードの会合[4]の親睦会に関しては個別に申し込んでください。雑誌 *The Missionary Herald*（以後、*MH*）に後日、親睦会委員会のお知らせが掲載され、その中で参加方法に関しての提案もあるでしょう。

敬具

ジェームズ　L. バートン

1．ベル　前出〈BE-9〉註７参照。
2．ホール財産：Charles Martin Hall（1863-1914）が遺した財産。電気分解により安価にアルミニウムを生産する方法を発明し、巨額の財をなした化学者。オベリン大学卒。遺言で、財産の大部分を慈善団体に寄付。最も有名な貢献はハーバード大学燕京研究所の設立。日本で恩恵を受けたのは東京女子大学の設立。（J. L. バートンに勧められて、神戸女学院も応募した。）
3．Mr. Davis　詳細不明
4．アメリカン・ボードの年次総会のことか。この年に開かれた108回大会はアメリカの第一次世界大戦参戦により規模を縮小して行うこととなり、開催地がロサンゼルスからオハイオ州コロンブスに、期間も10月15・16日の２日間だけの開催となった。（*MH* 1917年12月号、pp.592-595.）

〈ベル書簡 BE-10〉【小林弘美 訳】

1917年８月７日

メアリー　F. デントン
カリフォルニア州ロサンゼルス
西18番通り2525番地

拝啓　デントン様

頂戴したお葉書が手元にあり、図書館員にすぐに渡すつもりです。ご依頼の書籍と冊子をお受け取りになったら、ご要望が十分にかなったとお分かりになるでしょう。残念ながら私自身は『日本基督教徒運動』[1]の最新号を手元

に持っておりません。以前それを貸して、誰に貸したかを忘れてしまいました。ともかく返してもらっていません。宣教師教育伝道団[2]（ニューヨーク市５番街156番地）には在庫があり、売っています。

デントンさんが十分に休息を取れているといいのですが。この前の［日本］ミッションの会合は多くの点で興味深いものだったに違いありません。ご存知のように［日本］ミッションは、代表団の派遣を求めています。運営委員会は、先週代表団を送ることに同意しましたが、メンバーの構成に関しては、この手紙の段階では誰にも分かっていません[3]。バートン博士は行けません。パットン博士[4]からはまだ返事はありませんが、［仕事から］離れられるかどうかは疑わしいです。ベリー博士[5]が多分代表団の一員になってくださるでしょう。本部では事務担当を担う者、優れた聖職者、有能な実務家も望んでいます。

敬具

イノック　F. ベル

1．手紙文の中では *Japan Christian Movement* となっているが、同名の雑誌は見つからなかった。しかしながら、***The Christian movement*** *in the Japanese Empire*（**13-18号**　1915-1920、［Tokyo］Pub. for the Conference of Federal Missions）がそうかもしれない。この前身誌は **The *Christian movement*** *in Japan*（**4-12号**）、その前は **The *Christian movement*** *in its relation to the new life in Japan*（**1-3号**）となっている。出版社はそれぞれ異なる。

2．The Missionary Education Movement に関しては、当時ニューヨークに存在した出版社として Guide to **the Missionary Education Movement** of the United States and Canada Record/Presbyterian Historical Society がある。Sidney L. Gulick 著 *Working Women of Japan*（1915）も出版されているので、ここと考えてもいいだろう。

3．結局、Dr. J. C. Berry と Pomona 大学の学長 Dr. J. A. Blaisdell の二人が妻同伴で、副幹事の E. F. Bell が事務担当役として参加した。

4．Patton, Cornelius H.（1860-1939）アメリカン・ボードのボストン本部事務局国内担当幹事。

5．Berry, John Cutting（1847-1936）1872年アメリカン・ボードの宣教医として４番目に来日。神戸在任中は監獄伝道に励んだ。1878年岡山に移り、岡山県立病院

の顧問として医療と伝道に献身。1883年には京都に戻り、同志社病院と京都看病婦学校創設に尽力した。

〈ベル書簡 BE-11〉【阪上敦子 訳】

1917年９月29日

メアリー　F. デントン
カリフォルニア州サンフランシスコ
マーケット通り417番地310号室
太平洋ウーマンズ・ボード気付

拝啓　デントン様

９月12日付のお手紙を滞りなく拝受いたしました。そして私には代表団[1]についてのデントンさんのご意見に関心があるのですが、当局ではマッサチューセッツ州ウースターのベリー博士[2]、ミネアポリスのデビッド・パーシー・ジョーンズ氏[3]、そしてポモナ大学のブレイスデル学長[4]に代表団として行っていただくように依頼しました。ですが、これまでのところ、明確なお返事をいただいたのはベリー博士からだけです。ベリー博士と奥様は、すべて順調に事が運べばですが、１月中旬にサンフランシスコから出港予定です[5]。ブレイスデル学長にお会いになるとき、どうぞデントンさんから［代表団参加への］お口添えをお願い致します。博士はこのような大切な任務に適任の方です。十中八九、遅くとも２月中旬までには４人の方々が日本で合流され、そのときから年次総会までの間に全ての伝道の現場を見て回られることでしょう。多分、韓国も訪問されます[6]。

もしアーサー・ジェームズ氏[7]も同行できれば本当に素晴らしいことですが、その可能性はありません。多分、ジェームズ氏はいつか日本へ商用で出張しなければならないでしょうし、その折、伝道活動、とりわけ東京、京都、神戸間の車の行き交う沿道での活動をご覧になるでしょう。

コロンブス[8]でデントンさんとお目にかかる折には私は［うれしくて］目を丸くすることでしょう。お会いできるその機会がやってくるとは夢のようです。

敬具

イノック　F. ベル

1．代表団　前出〈BE-10〉註３参照
2．ベリー博士　前出〈BE-10〉註５参照
3．Jones, David Percy（1860-1927）アメリカン・ボード副会長
4．Blaisdell, James A.（1867-1957）ポモナ大学第４代学長（在任1910-27）
5．J. C. Berry 夫妻と J. A. Blaisdell 夫妻は、1918年１月23日にサンフランシスコを出港。ホノルルで２週間過ごし、２月25日に横浜に到着。
6．一行は、フィリピン諸島での調査を終えた E. F. Bell と横浜で合流し、日本各地のステーションを廻り、宣教師や日本人教役者と会合を重ねた。その間に当時日本の植民地だった韓国や中国における日本人キリスト者による伝道の視察もした。
7．ジェームズ氏　前出（13）〈D-53〉註５参照
8．前出〈B-28〉註４参照。その年の年次総会はコロンブスに変更された。

〈バートン書簡 B-29〉【吉岡弘子 訳】

1917年11月21日

メアリー　F. デントン
マサチューセッツ州ボストン
チェスナット通り107番地
グレース・ニコルス様方

拝啓　デントン様

昨日、運営委員会はあなたの日本への帰国を認めましたが、ついては、いつもの通り満足のいく健康診断書が必要です。ベリー医師[1]が他の方より多くの点で適していると思います。彼とあなたは懇意ですし、あなたの体質に

精通しておられます。また日本の国や気候、日本で必要とされるものをご存知です。昨日12時に、思いがけずベリー医師が［事務室に］来られました。もしデントンさんがここで待っておられたら、彼に会えたかもしれませんが、いつもより早く来られるとは誰も思っていませんでした。

敬具

ジェームズ　L. バートン

1．ベリー医師　前出〈BE-10〉註５参照。同志社では、病院建設や看護師の育成、さらに治療に当たったため大変感謝されていた。この代表団の中心的人物であり、今回の来日でも多くの旧知の人たちとの再会を果たした。（*MH* 1918年８月号、p.347）

〈バートン書簡 B-30〉【矢吹世紀代 訳】

1918年１月16日

メアリー　F. デントン
マサチューセッツ州ボストン
チェストナット通り107番地
グレース・ニコルス様方

拝啓　デントン様

ちょうど今アメリカン・ボード本部に届いた電報は、明らかにあなた宛のものですが、次のように書かれています。

「デントン様

フェルンスターク[1]、ボストン。

辞職撤回[2]

（署名）原田[3]」

昨日オルチン夫人[4]から手紙を受け取りました。今クリフトン・スプリングス[5]の療養所に滞在中で、回復に向かっているが、少なくとも２月末まではそこへいることになるだろうとのことです。オールズ[6]氏ご一家はシカゴに到着し、木曜日の午後オーバーンデール[7]着の予定、と電報で知らせてきました。一家は差し当たり、「宣教師の家[8]」を拠点とするでしょう。

敬具

ジェームズ　L. バートン

1．Fernstalk はアメリカン・ボード本部の Cable Address。

2．辞職撤回　原田助は前世紀末の「同志社騒動」で疲弊した同志社を立て直すべく、多くの校友の期待を背に、1907年神戸教会牧師を辞任して第７代社長に就任。３期12年に渡る在任の第２期始めの1912年に、全校友の資金上・理念上の応援を受けて、新島が念願していた大学設立（専門学校令による）を果たした。しかし、これに起因して同志社内は意見が３分され、「中学・普通学校の論理」「校友の論理」「大学の論理」から非難される結果を招いた。いわゆる「大正六、七年　同志社紛擾」の渦中の人となり、1917年12月27日付で理事会に辞職願を出していた。この時点で留任を決意したことを示す（『同志社百年史通史編（一）』同志社1979年、pp.780-787参照）。

3．原田助　前出（13）〈D-53〉註19参照。

4．Allchin, Nellie Stratton（1860-1921）夫は1882年宣教師として来日した George Allchin（1852-1935）で、日本で賛美歌集を編纂・発行した。神戸女学院理事も務める。娘の Florence Stratton は1910-11年の１年間、音楽教師として同志社女学校に在任。

5．Clifton Springs はニューヨーク州オンタリオ郡にある村で、硫黄泉で有名な保養地。この地域やサナトリウムの建物は現在、国家歴史登録財になっている。新島襄や N. G. Clark も静養のため、滞在した。

6．Olds, Charles Burnell（1872-1971）1899年ハートフォード神学校卒。1902年、J. D. Davis の二女 Genevieve Woodbury と結婚し、1903年アメリカン・ボード宣教師として来日。1903年から1913年まで宮崎に滞在、その後、新潟や岡山でも伝道活動をする。

7．Auburndale　ボストン郊外 Newton にある村のひとつ。

8．the Walker Missionary Home のこと。元々は Eliza Walker 夫人が経営していた宣教師の子供たちを両親が赴任中に預かる the Walker Home for Missionary

Children という施設がオーバンデールにあったが、夫人の没後、宣教師の家族などが帰国の折などに滞在する施設としても使われた。

〈デントン書簡 D-56〉【小島紀子 訳】

1918年１月25日受領

１月22日　クリーブランド

拝啓　バートン博士

原田社長[1]から先週受け取った「辞職撤回」という電報をケース氏[2]があなたにお見せしたと思います。そして今、同封の手紙が届いています。それは私にお返しいただければと存じます。これは本当にいい知らせで少し進展がありましたので、ご報告いたします。モット博士[3]は同志社を支援したいのはやまやまだが、今は手に余るほど多くのことを抱え込んでいると書かれた上で、ホール遺産[4]のことは知っているか、［同志社は］それに申請できるかをお尋ねなのです！また、いつでも自分の名前を引き合いに出して、博士が同志社と、その基金集めの努力に対しては深い共感を示し協力的だと言うように、とおっしゃっているのです。

アーサー・カーティス・ジェームズ氏[5]は、今は私たちのために何もできないとのことですが、［母上の］ジェームズ夫人[6]は、もし今私が２万ドルを調達できたら、今年は5000ドル、そして来年は5000ドルの寄付をすると言ってくださいました。私が仕事で慌ただしい10日間を過ごしている間に、旧友のエルドリッジ・ファウラー夫人[7]が、「ファウラー記念基金として２万ドルをあなたに寄付を約束する」と、電信を送ってくれました。ああ、神様のなさることは何と素晴らしいことでしょう！ジョージ・プリンプトン氏[8]とデイ博士[9]が、何かをしようとオーバートの話題[10]を取り上げてくれており、少しだけ前進しました。しかし、ご存じのとおり、この２万ドルは女子部のためのものです。私は神学部のために、そして同志社の他の学部のためにもお金を得たいと切望しています。

敬具

メアリー・フローレンス・デントン

1．原田社長　前出（13）〈D-53〉註19参照。
2．Case, Herbert E. B.（1877-1966）アメリカン・ボード関係者が本国を出入国する際の事務手続きを担当していた本部職員のようで、今回のデントンの出国手続きに関しても、［ケース書簡1-4］の書簡のやり取りがある。マイクロフィルムでは署名が完全には読めない場合も、彼からの出国関連の書簡と判断して差出人はケースとした。
3．モット博士　前出（13）〈D-53〉註10参照。
4．ホール遺産　前出〈B-28〉註２参照。
5．ジェームズ氏　前出（13）〈D-53〉註５参照。
6．ジェームズ夫人　前出（13）〈D-53〉註６参照。
7．Fowler, Margaret Brewer（1863-1931）サンフランシスコ出身。1882年、両親とハワイに移住。そこでいくつかの学校で教師となり校長も経験する。14年間、教育者として滞在の後、1899年ニューヨーク大学で女性としては当時珍しい修士号を取得。1902年 Eldridge Fowler と結婚するが２年後死別。莫大な遺産を相続して YWCA への資金提供や、女性の教育及び問題ある青少年の施設 Boys Republic の建設、運営などに巨額の資金を提供し助けた。
8．Plimpton, George Arthur（1855-1936）マサチューセッツ州出身で、1876年アーモスト大学卒業。後にアーモスト大学理事となる。教育史に関する歴史的書物や古文書の収集で知られる。1919年11月来日の際に女子部のために古屋を購入して寄贈。プリンプトン寮と名付けられた。
9．Day, William Horace（1866-1942）〈デントン書簡282〉（『アスフォデル53号』p.187）に登場するロサンゼルス第一会衆派教会牧師、Warren Finney Day の息子。1913年父没後、後を継いで1917年までは父の教会で、1937年まではコネチカット州で牧師を勤めた。父同様、活発に活動する著名な牧師だった。
10．Aubert（不詳）

〈バートン書簡 B-31〉【柿本真代 訳】

1918年１月26日

メアリー　F. デントン

ワシントン州シアトル

15番通り北東3007番地
アーサー・タルカット夫人方

拝啓　デントン様

１月22日付お手紙を受け取ったところです。同志社への寄付遊説の旅を見事に成功されたことにお祝いを申し上げたいと思います。水曜日の夜にスミス博士[1]のご自宅へうかがった際、博士がこのことを教えてくださいました。私たちは同志社の件をホール遺産理事会へ提出しています。ご記憶と存じますが、ホール遺産[2]の条件のひとつに、アメリカまたはイギリスの管理下にある学校に使用されなければならないというものがあります。この条件では同志社のために使うことは難しくなりそうです。私としては強く訴えたのですが。

原田社長[3]の手紙を読ませていただけたことに大変感謝しております。彼が辞任を撤回したという電報については知っていました。

ご親切にお送りいただいた書類を返送いたします。いただいたお手紙には住所が書かれておりませんでしたので、この手紙がお手元に届くのは時間がかかるかも知れません。私からの敬意とお祝いの気持ちを込めて送ります。

敬具

ジェームス　L. バートン

封入物

1．Smith, Edward Lincoln（1865-1940）バートンらとアメリカン・ボードの本部通信担当幹事を務める人物で、中部地区代表もしていた（*MH* 1918年１月号、p.viii）。
2．Hall Legacy：他のデントン書簡ではHall Willあるいは Hall Estateとある。前出〈B-28〉註２参照。
3．原田社長　前出（13）〈D-53〉註19参照。

〈ケース書簡 CA-1&2〉【阪上敦子 訳】

1918年１月30日

メアリー　F. デントン
ワシントン州シアトル
北東15番通り3007番地
アーサー・タルコット夫人方

１通目

拝啓　デントン様

本部のファイルであなたの記録カードに目を通していて、日本への帰国の期限が来ていることを知りました。そこで、パスポートに関連する詳しい書類をお送りいたします。正確にいつ出発されるおつもりか存じませんが、デントンさんがパスポートを適切に準備できるように必要な情報すべてを入手されていることを確認しておきたいのです。

アメリカ国籍を持つ人向けのパスポート申請用紙を３部同封しています。バンクーバーから出港されるのでしたら３部すべてに記入しなければなりませんが、サンフランシスコかシアトルからなら必要なのは２部だけです。申請方法が載っている添付書類がお入り用でしょう。この用紙にはデントンさんが裁判所の書記官のところに出頭する前に知っておくべき主な必要事項が記載されています。その他の事柄は書記官が処理してくれるでしょう。サンフランシスコか、どこか他の郡の所在地で適当な裁判所を見つけることはデントンさんにお任せしなければなりません。デントンさんが日本へ行かれる理由を説明した国務省への文書も同封しています。この文書は申請書に添付しなければなりません。日本へのパスポートにビザは不要です。

デントンさんはカリフォルニア州オーリンズ[1]のお生まれだと書き留めています。ですから出生証明書をその地の役場の職員から手に入れることができるでしょう。もしだめならお母上かどなたかご友人がきっと家族の記録や

個人的な記憶を頼りに公証人に出す宣誓供述書を用意して下さると思います。お望みなら当方の記録からあなたの出生の宣誓供述書を用意して差し上げることはできますが。

必要事項はすべて網羅したと思いますが、何か疑問が出てくれば、どうぞいつでもお手紙をください。ご出航前にパスポートがお手元に届くには普通、１か月で十分でしょう。

敬具

［ヘルベルト　E. B. ケース］

１．オーリンズはオレゴン州に近いカリフォルニア州の北西部、州道96号沿いにある。元々はパナムニクと呼ばれていた。鉱夫や入植者によってニューオーリンズバーと名付けられたが、1855年にオーリンズバーと改名。現存するデントンのパスポート申請書類には出生地は“near Nevada City”と記されている。

２通目

1918年１月30日

ワシントンD. C.

国務省市民権局

拝啓

これはミス・メアリー・F. デントンがアメリカン・ボードの宣教師であることを証明するものである。ミス・デントンは現在休暇中だが、京都の同志社大学での教師としての職務を再開するため日本に帰国予定である。アメリカン・ボードはこの書簡を受け取る各位に対してミス・デントンが忠実なアメリカ国民であると衷心から推薦するものである。

敬具

［ヘルベルト　E. B. ケース］

〈デントン書簡 D-57〉【吉岡弘子 訳】
1918年３月４日受領

アメリカン・ボード（ABCFM が印字された便箋使用）
M. F. デントン
ケルシー博士[1]気付

拝啓　ケース様

パスポートの件でお手数をお掛けし、厚く御礼申し上げます。こちらオレゴン州ポートランドで書類を作成し、ワシントンへ直送しました。出生証明書が私の手元に届くのが遅れたので、パスポートは２月22日付で申請いたしました。そして大きな間違いをしたのではないかと心配しているのですが、パスポート送付の郵便物宛先として、サンフランシスコ、ケルシー博士気付、と書いて出してしまったのです！そちらからお返事をいただくまでは気が気でなりません。多大のご面倒をお掛けしていないと良いのですが。

（パットン博士[2]に会って来たばかりのフランシス・クラップ[3]さんという方がおられますが、その方は私と一緒にいつでも日本へ行ける方です。お父上はこちらオレゴン州で国内伝道師をされていましたし、友人たちは旅費として250ドル、そして同志社女学校での３年間のために650ドルを特別に募金されました。）クラップさんは４月１日にペルシャ丸で私と日本へ行くことができますが、こんな短期間でパスポートが取れますでしょうか。パットン博士はクラップさんの住所をご存知でしょうから、彼女がすぐに出発できるかどうか、ケースさんには簡単にお分かりになるでしょう。本部[4]のどなたかがクラップさんを知って２年になるようです―たぶんフィシャー氏[5]だと思います。どうかウィギン氏[6]に旅費の250ドルを私の口座からクラップさんに前払いして下さるよう依頼して下さい。こちらから送金するだけの時間はないでしょうから。

私のために手を尽くして下さったことすべてに感謝申し上げます。

敬具

メリー・フローレンス・デントン

1．Kelsey, Henry H.（1853-1926）アメリカン・ボード太平洋沿岸地区の代表。マーケット通り417番地はこの事務所の所在地である。また［BE-9］及び［BE-11］記載の太平洋ウーマンズ・ボードの事務所も同じくここである。
2．パットン博士　前出〈BE-10〉註４参照。
3．Clapp, Frances Benton（1887-1977）インディアナ州ローガンズポート生まれ。オレゴン州パシフィック大学で音楽を学び、卒業後２年間母校で教鞭をとったのち、さらに２年間ドイツで研鑽を積む。その後、カリフォルニア州ポモナ大学でピアノを教えていた時、デントンにスカウトされて同志社女学校音楽教師として来日。以後定年まで、同志社女子部の音楽教育に多大の貢献をする。デントンとは生涯にわたって親交を結び、デントン没後一番早い時期（1955年）に、同志社より委嘱されて伝記 *Mary Florence Denton and the Doshisha* を執筆。
4．原文では Cong House とある。アメリカン・ボードの本部のこと。住所は Congregational House, 14 Beacon St. Boston。
5．Mr. Fisher 詳細不詳
6．Wiggin, Frank H.（1851-1920）アメリカン・ボード本部事務局の財務担当役員。1886年に財務部門で働き始め、1896年に財務担当に就任。1920年に亡くなるまで24年間その職にあった。

〈ケース書簡 CA-3〉【鈴木文子 訳】

1918年３月４日

メアリー　F. デントン

カリフォルニア州サンフランシスコ

マーケット通り417番

ヘンリー　H. ケルシー牧師気付

拝啓　デントン様

オレゴン州ポートランドで書かれたらしい、デントンさんからのパスポー

ト関連の手紙を受け取りました。お手紙によりますと、デントンさんはパスポートの宛先を、カリフォルニア州サンフランシスコのケルシー博士[1]気付と国務省に伝えられたようですね。パスポートの配達を保証するほどケルシー博士がサンフランシスコで十分有名な人物かどうか私は疑わしいと思っています。したがって、サンフランシスコ郵便局へ完全な住所を記載して送ることをお勧めします。私は国務省にこの件について手紙を出しておきます。そうすれば、万一パスポートが国務省に戻ったとしても、どこに転送すればよいか分かるでしょう。この状況で私ができることはこれだけですが、デントンさんが出航前に余裕をもってパスポートを受け取れるだろうと信じています。

フランシス・クラップさん[2]についてはパットン博士[3]と話をしました。博士はクラップさんもマクリントックさん[4]も間違いなく明日の運営委員会で認定期間付きの宣教師[5]として受け入れられるだろうとおっしゃいました。クラップさんはこの近くに住んでいますので、４月１日の出航に間に合うようにすぐにパスポート問題に対処することができます。マクリントックさんの父上はすでに彼女のパスポートを準備しています。委員会の決定が出たら、パスポート申請に必要な彼女の宣教師としての身分を示す書類をお父上に送るつもりです。旅費についての問題はご提案通りウィギン氏[6]とお話できるでしょう。

候補者［お二人］を得られたことをお喜び申し上げます。そして快適な船旅をお祈りしています。

敬具

［ヘルベルト　E. B. ケース］

１．ケルシ―博士　前出〈D-57〉註１参照。
２．クラップ　前出〈D-57〉註３参照
３．パットン博士　前出〈D-57〉註２参照

4．McClintock, Hilda（1893-1953）イリノイ州シカゴ出身。1913年シカゴ大学卒業。父はシカゴ大学教授。1918年４月20日デントンと一緒に横浜到着。４月から９月まで同志社女学校で教える。９月３日ミッションを引退してシベリアで赤十字の仕事に従事。（シベリアでテキサス出身の陸軍大尉 James David Brown と知り合い、1921年２月９日イリノイ州で結婚）
5．under a term of appointment 正規の宣教師ではなく、ボランティアとして自費で一定期間奉仕をする制度があったようである。
6．ウィギン氏　前出〈D-57〉註６参照。

〈ケース書簡 CA-4〉【阪上敦子 訳】

1918年３月19日

メアリー　F. デントン
カリフォルニア州　サンフランシスコ
マーケット通り417番地
H. H. ケルシー牧師気付

拝啓　デントン様

そちらからのお葉書であなたとマクリントック[1]さんのパスポートが届き、お二人の出航便が明らかになったことを知り喜んでおりました。ご負担には全くなってほしくないのですが、紹介状を２通同封いたします。その他の書類に加えて持っていてよかったと思ってくださり、万一緊急の折には役に立つかも知れませんから。

クラップ[2]さんはデントンさんと一緒の船では行けないようですね。出立の船便についてはしばらく保留されていたのですが、今は５月中には出発のお積りです[3]。このことは国内伝道部から知りました。多分、詳細についてはデントンさんの所にご連絡があるでしょう。

快適な船旅を、そして大切なお仕事に無事に復帰されることを願っております。

敬具

［ヘルベルト　E. B. ケース］

１．マクリントック　前出〈CA-3〉註４参照
２．クラップ　前出〈D-57〉註３参照
３．クラップの来日は、実際は1918年８月17日となった。

［謝辞］注作成に際し、調査しても不詳であった何人かの生没年を八木谷涼子氏からご教示いただきました。御礼申し上げます。